

サイエントロジーと 他の宗教との関係

澤田 沙葉

唯一神道秘伝
八代目継承者



1996年4月



サイエントロロジーと 他の宗教との関係

サイエントロジーと
他の宗教との関係

目次

I. はじめに	1
II. サイエントロジーとは何か？	2
III. サイエントロジーと諸宗教との相互関係	3
IV. サイエントロジーの実践 - オーディティング	5
V. 儀式	7
VI. 結論	7
著者について	8



1996年4月

澤田 沙葉
唯一神道秘伝
八代目継承者

サイエントロジーと 他の宗教との関係

1. はじめに

本著者は日本人であり、本書はサイエントロジーという宗教と世界の諸宗教との、類似ならびに差異について述べるものである。本書はまた、一日本人の観点からこれらの類似点、差異点に特別の注意を払うことによって、サイエントロジーを日本の宗教とも比較するものである。

宗教という用語は日本語で、起源を教える、起源のみなもとを教えることを意味する。これは日本人の宗教定義だが、必ずしも西洋世界での定義と合致しないかも知れない。本書の議論ではこの日本的定義を用いることにする。さらに、日本の法律的議論の言葉を借りるなら、宗教団体がひとつの宗教であるためには、教義の宣布、宗教儀式の施行、信徒の訓練を行うものでなければならないという言い方も加えることができる。サイエントロジーは、以下の概略で述べるように、これらすべてを実践しているのだ。

「和歌」と呼ばれる31文字の詩歌のひとつに、「分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」という歌がある。これは古い詩歌であり、これはキリスト教が我が国に到来する以前のものである。ここで言及されていることはすなわち、日本の二大宗教、つまり神道と仏教のことなのだが、人がどの宗門に属していようともその頂点は同じである、と

いうことを謳ったものである。つまり言わんとするところは、何故に争うかということである。しかしもっと重要なのは、宗教間にこんなに沢山の類似性があるというのに、何故その差異性にばかり注目するのかということなのである。

サイエントロジーは日本では、多くの図書館にその創始者L. ロン ハバード氏の著作だけでなく、サイエントロジー教会の著作が蔵書されているにもかかわらず、その宗教自体は余り知られていない。私はこの主題のために30冊ばかりの本を読破したが、この主題についてさらに知識を得たい方々には、これらの本を読まれることをぜひお勧めする。

II. サイエントロジーとは何か？

サイエントロジーの起源は1930年代にさかのぼるものであり、後にサイエントロジーの創始者となる、アメリカ人のL. ロン ハバードが、東洋を旅し、現地の人々が何故こんなにも惨めな人生を送っているのか、と自問したことに端を発する。当時まだ若かったハバード氏が、人が何処から来て何処へ行こうとしているのかと問いかけても、答えられる人間が誰もいなかったのである。

1950年、ハバード氏はダイアネティックス（「心を通して」という意味）というタイトルの書籍を著した。その書籍『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』は非常に有名となり、すぐにベストセラーとなった。そしてすでに1,700万部以上も売れたという。ダイアネティックスの運動が盛んになるにつれ、その研究も精神から靈魂へと発展し、もうひとつの主題 — つまり、サイエントロジーが生まれた。そして最初の教会は1954年にアメリカ合衆国で創設された。ダイアネティックスが最初に日本へ到来したのはこのすぐ後なのだが、日本でのサイエントロジーの歴史の実質上の始まりとなったのは、1962年、最初の正式なサイエントロジー日本の開拓伝道が始まったことによる。1962年9月10日、最初のサイエントロジー公開講演会は聴衆で埋め尽くされていたという。

「サイエントロジー」という言葉は、ラテン語のscio、すなわち「その言葉の最も完全な意味において知ること」とギリシャ語のlogos、すなわち「研究すること」という語から来たものである。

『サイエントロジー：思考の原理』という本の中でハバード氏は、この主題は心理学の諸起源に由来するが、現行の心理学からではなくむしろ古い心理学からであり、この学問の霊的本質が除去される以前の前世紀における、世界宗教で教えられていたものであるという点を理解しなければならない、と述べている。

心理学とは文字通り「魂の学問」である。今日の心理学はこの意味を失ってしまい、もはや魂を学問の対象として扱わず、学問の真正な領域とさえ認識しなくなった。この意味でサイエントロジーは、ほとんどの世界的宗教が行うように、魂を研究するものとして非常に類を異にするものである。

宗教は一般的に、人間の魂がこの宇宙の偉大な「生命力」に関わりを持つことを認めるが、この「魂」という言葉は定義し難いものだ。ある人は、魂とは事実、人間の思考であると主張するようである。しかしながらサイエントロジーでは、この「魂」という言葉は、「その人自身」を指す言葉であり、単なる精神ではない。日本の神道のひとつである生長の家では、魂は「神の子」と呼べるものとして表現されている。魂は日本語の「ヒメ」、または「ヒコ」という言葉に相当するとされている。サイエントロジーでは、ハバード氏が、他に現存する言葉で魂を十分に表現する言葉が見当たらなかったため、ギリシャ語から魂を意味するものとして、セイトンという言葉を選び出した。

新しい概念であるため、現存する言葉に的確な表現が見当たらない考えを説明するため、新しい言葉を創り出すという方法は、宗教の世界では珍しくないことである。日本では、真言宗（非常に古く、伝統的でしかも規模の大きい密教）の開祖である弘法大師が、その宗門の教えが実行されるために必要な多くの言葉を編み出した。

しかし同時に、サイエントロジーには神を表す新しい言葉は編み出されなかったのである。神の概念構成などということは、サイエントロジーが研究する領域ではない。また会員はこの言葉が何を意味し、何を意味しないかということにそれぞれさまざまな考えを持っているに違いないのだが、この概念を表す言葉として「神」はもちろん、他に「至高の存在」、「無限」、「すべてのもののすべてなるもの」、「宇宙の創造主」という表現が用いられている。

サイエントロジーは他のさまざまな宗教と違い、神の概念に関してこれといった教義を持たない。むしろ、ひとりひとりが宇宙や物質の理法に相応しい神への理解を持つことを許している。そこから、信仰が自然に溢れ出る。そのためサイエントロジーを学ぶ者は、さまざまな人生経路や国籍を背景に持つだけでなく、宗教的にも多種多様な背景を持つ人達の集まりだと言えるだろう。日本あるいは東洋では、ある人がふたつ以上の宗教の信者であることは決して珍しくはない。このような伝統があるため、他の宗教を捨てることなしにサイエントロジーを学んでいる人が、日本には何人もいる。私の理解するところでは、これらの人々は、自分の以前からの宗教的決意と神への信仰がさらに強まるよう、サイエントロジーの勉強を役立てているようである。それゆえ、この点が比較的新しい宗教なのであり、信徒を広く仏教、キリスト教、その他の宗教から集めている生長の家という神道系の宗教と、その実践において少し考えが似ているように思えるのだ。

III. サイエントロジーと 諸宗教との相互関係

サイエントロジーは、仏教と明らかな類似性を持っている。余りにも類似しているためハバード氏は、アジアの仏教指導者らに自分は仏陀が予言していた弥勒菩薩ではないだろうか？と問いかけたほどだという。覚者という意味の仏陀であるゴータマ・シッダルタは死ぬ直前、弟子たちを集めて、将来も

うひとりの仏陀が現われ、自分が始めた仕事を完成するだろう。その仏陀は、弥勒菩薩と呼ばれるだろうと語っている。本当にハーバード氏が、あの偉大なシッダールタの慈悲溢れる志を完成させるべき人物であるとして見るべきかどうかは、時のみぞ知る問題だ。ハーバード氏が発したこの問いに答えるのは、本書の目的ではないであろう。しかし、予言の実現という点では、他の諸宗教と大小のいかに問わず、もうひとつ類似性を持っているようである。

私が最初に読んだ本は『サイエントロジー：思考の原理』である。この本を読み出してすぐ、ここで言われている内容は、実によく神道で言われることに似ていると思ったものだ。特に、生命は見かけにしか過ぎないということ、そして物質世界は実は見かけの世界なのであり、感覚によって知られるに過ぎないものであるという点である。この点は、生長の家の教祖である谷口雅春師の教えに酷似している。(谷口師は、もうひとつの日本の神道、大本教の出口王仁三郎聖師の『宇宙の物語』を記した4人の著者のひとりであった。)大本教が19世紀の終わりに、そして生長の家が1920年代の初めに始められたものであるから、大本教と生長の家はそのどちらも、日本の歴史においては比較的新しい宗教である。

同じく「生命は見かけにしか過ぎない」という考えが、仏教でも「色即是空、空即是色」という言葉で表現されている。これは簡単に言えば、五感で認知できるものはすべて無であり、空であるという意味である。仏教はまた、人の世界は思惟の現れにしか過ぎないとも教える。もちろん仏教は、サイエントロジーが深い意味を持つと同じように、含蓄の深い教えを持つ宗教である。

生命や精神についてのこれ以外の教えにも、神道が信じることと対比できるものがある。例えば、経験の記憶は記録映画のように保存されたものであり、その出来事は、記憶する者がひとコマひとコマ再生できるものであるなどである。これもまた生長の家の教えとよく類似している。しかし、サイエントロジーで最も興味深い用語のひとつは、セータ (theta) という言葉であり、唯一神道でこれに匹敵するものは「宇宙の偉大な生命力」という意味の言葉である。この考えはまた、明治維新の時まで天皇家の祭祀の担当をしていた伯家神道という宗教の考えと共通するものである。この同じ考えが、戦後ブームとなった真光教のような比較的新しい神道の基礎となっているのである。

人間には前世があったという考えは、東洋の宗教には古くからあるものであり、十分受け入れられている。サイエントロジーの理論ならびに実践は、このような考えを中心に構築されており、人はハーバード氏がセイタンと名づけたところの霊的な存在であり、人は前世の生活を思い起こすことができるだけでなく、霊的な存在として、過去の行動が現在におけるその人の状況を決定する、というものである。日本には現在18万以上の宗教団体があるが、私が思うに、この考えは多少の違いこそあれ、ほとんどの宗教に共通して説かれているもののようである。もちろんこの考えは仏陀の時代のみならず、遠くインドの偉大な諸宗教の根源である、ヴェーダの時代にもさかのぼれるものである。

IV.サイエントロジーの実践 – オーディティング

サイエントロジーの中心的な実践はオーディティングと呼ばれるもので、これはラテン語のaudireつまり「聴く」という意味の言葉から来ている。オーディター（「聴く人」）が与えた質問に答えることで、人は自らを精神と魂の崇高な状態に持っていき、また心因性の苦痛を癒す。この手法は、日本で1400年をさかのぼる歴史を持つ唯一神道系の新興神道宗派のいくつかが行うやり方と全く共通する。

サイエントロジーの思想は、1930年代のハーバード氏の初期の研究に端を発する。この頃、時を同じくして新興神道宗派は、魂を癒すための応用可能な宗教実践の方法を探索していた。オーディティングは、米国で1950年、『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』が出版された時に始まった。この本の中でハーバード氏は、どのようにしたら人は「クリアー」と呼ばれる状態に到達することができるかを概略説明している。この状態は、「反応心」と呼ばれるものから自由になることである。それはまた、仏教で言われるところの「悟り」とか「内観」というものと対比できるかも知れない。いくつかの神道宗派には、教師の指導に従って、幼年時代あるいは前世の自分について黙想し、現在の自分に至るまでの道のりを反省させるものがある。オーディティングは、幼年時代にしろ前世の生活にしろ、人の過去を反省することとも言えるものであるが、同時にまた、その人の生活の現在の状態に一貫した反省と理解をもたらすことであるとも言える。

オーディティングの実践方法は、サイエントロジーのアカデミーと呼ばれる実践講座、ならびに科目学習の教室で学ばれる。生徒はそこで監督者の指導のもとにオーディティングの技術について本を読み、実習する。オーディティングは、クリアーの状態に至っていない人に、その人の過去についての質問に答えを得るオーディターの実践である。オーディティングを受ける人はまだクリアーの状態に至っていないため、「プリ・クリアー」と呼ばれている。クリアー以前の人が、オーディターによって出された質問に答える時、その人は抑圧からの解放、精神の改善と安らぎ、そして晴れ晴れとした精神の安息を体験する。有能なオーディターになるためのトレーニングの期間はさまざまであるが、オーディターが達成しようと勉める有能さの程度、厳密さによって、時には数ヵ月あるいは数年を要したりすることもある。

大本教では「内観」の方法が未だ実施されており、非行少年少女の更生を行い、地方自治の政府機関から推薦を受けているほどである。ここでも同じことが言えるのだが、サイエントロジーも世界中の多くの場所で、非行少年少女の更生プログラムを行っている。もちろん内観とオーディティングは、ともに類似性を持っていながら、また根本的には相違する面を持つ。これは、ふたつの宗教が同じ問題にふたつの違った文化から取り組み、明らかに同じ解答に到達するということのひとつの良い例である。オーディティングによって人は、過去から絶えず自分の生活を悩ましてきたものを一字一句、オーディターに語るができるようになる。「内観」では、人は教師の保護観察のもとで自分自身を反省する。双方の目指す結果は、魂の活動改善、倫理的行為への復起である。

生長の家の実践にも「神想観」と呼ばれるものがあり、人は自らの過去を通して自己に立ち向かうよう訓練される。これもまた、オーディングと類似性をともにしている。双方の実践において、人は自らの過去に立ち向かわされるからである。

サイエントロジーには、完全なる自由へのブリッジと呼ばれる教化への段階を順序づけた道のりがある。オーディングを受け、オーディングを行う方法を学ぶことによって、このブリッジを渡りきることの意図は、ただ単に偉大な教化を受けるだけではなく、主流の神道宗派が教える「鎮魂帰神」、つまり「人の靈魂を鎮め、その人が神に近い状態に立ち戻るようにすること」に匹敵する魂の状態である。これらは概念的に非常に似通っている。これは、西暦1025年に発足した伯家神道を含む、さまざまな神道宗派で実践されてきたことである。

魂の自然な癒し方を通して人を幸せにするという方法は、他の宗教でもなされているように、日本の宗教でも未だ活発に行われている。生長の家、世界救世教、神道天行居教、三五（あなない）教、その他の宗教はみな、鎮魂帰神の状態に持っていく日本の実践の手法に多大な興味を抱いている。信徒の数は2千万人を数える。その実践技法はそれぞれ違うが、その目標とするところは、サイエントロジーがオーディングを行い、その会員を一步一步全面解放への橋を昇らせるという点と直接類似するものを持っている。

他の世界的宗教においても、このような到達目標を記述しないものは無いほどである。イスラム教では、「イマーム・ザマーム」という悟りを開いた人は、聖典コーランの七種類全部の意味が完全に認識できるという意味の状態を目指す。

キリスト教徒の告白でも、人は自らの過去と立ち向かわざるを得ない。これも、告解カウンセリングを提供するサイエントロジーとよく類似している。自分の過去を省みなければならない人間は、それとともにもうひとりの人間、オーディターに立ち向かい — そして告白しなければならない。これらふたつの信仰にとって、その結果は同じである。つまり靈魂の改善と正常な生活の復起である。

これで私たちは、循環運動の最初に戻り、いつか弥勒菩薩が現われて人を束縛しているものから解放するであろうという仏陀の予言に戻らざるを得ない。日本では、弥勒菩薩の予言はパーリ語で書かれている小乗仏教の教えと異なる。小乗仏教で予言されているのは、人が必ずしも霊的な状態へと戻るというのではなく、むしろ戻る道を得るという形のものだ。日本の多くの宗教は、仏教であれ神道であれ、このようなことが起こるのを心待ちにしていた。サイエントロジーは、人間の霊的能力を高める手段を持ち合わせている。日本は、宗教が人間の霊的能力を高める点を強調する国である。そのため、一日本人の観点からすればサイエントロジーはまさに、日本に既存する宗教と類似する宗教とすることができるのだ。

V. 儀式

宗教は儀式を持たずして完全な宗教とは言えない。そして、サイエントロジーには『背景と儀式』という本があり、サイエントロジー教会の聖職者が葬式、結婚式、命名式など、その他の式を執り行う際にこの本を用いる。西洋社会では日曜礼拝も行われている。

VI. 結論

結論として言えることは、サイエントロジーが宗教以外の何ものでもない、ということである。サイエントロジーは、西洋のどの宗教よりも日本の宗教と多くの類似性を持っており、これがために西洋では、他の主流宗教と類似しないという理由で誤解されているようである。しかし、とにかくサイエントロジーは国際的宗教であり、信徒数2千万を数える日本の宗教に酷似するものであるとすることができる。

私はまたここで、英国の優れた宗教学者であり、オックスフォード大学名誉教授であられるブライアン・ロナルド・ウィルソン博士を紹介させていただきたい。博士はサイエントロジーについての詳細な研究を書物にしたためているので、西洋的学問の観点からサイエントロジーをさらに詳しく勉強されたい方には、この研究を是非一度お読みになられるようご推薦させていただきたい。

澤田 沙葉 著

1996年4月

著者について

澤田沙葉 (本名：二美雄) 氏は日本最古の宗教である唯一神道の秘伝八代目の継承者です。唯一神道とは、ただひとつの神、天地の創り主の道、という意味です。唯一神道玉祖 (たまのや) 秘伝の八代目継承者であり、秘伝の一代目は、1440年前の聖徳太子です。二代目継承者は、日本初の歴史書である古事記を書いた712年の天武天皇です。秘伝の三代目継承者は修験道の開祖、役行者 (えんのぎょうじゃ) です。

澤田氏はかつて日本の最も有名な大学のひとつである上智大学で理事を勤めました。また日本キリスト民主同盟の議長でもあります。またメッカへの巡礼を3回完遂され、ハジというイスラム教で崇拝される称号を授与されました。そして日本のアフルル・バイト (A.S.) センターの所長でもあります。彼の長男は現在イランでイスラム教を勉強しており、次男はバチカン市国で勉強しています。